

■ 2020年度からの「大学入学共通テスト」の試行調査（プレテスト）が11月10, 11日に行われた。そのIAについて感想を述べる。

そのために、このプレテストについて、以下を踏まえておきたい。

- (i) 記述問題がIに含まれる。
- (ii) そのために、解答時間が70分へと10分間拡大した。
- (iii) 昨年11月に行われた第1回のプレテストで、記述問題の正答率が余りにも低かったため、正答率を上げる工夫が求められていた。

■ 全体の感想を述べる。

Iが（記述問題を含めて）大幅に易しく、基本的になった。

一方で、Aの分量が大幅に増大した。

邪推すれば、記述を易くするために、Iは基本的にならざるを得なくなり、平均点を50点程度とするために、Aを難しくする（あるいは、分量を増大させる）方向をとったのではなかろうか。

2018年のセンター試験（本試験）で、Aの選択問題（3題から2題を選択）は各問2ページずつだったが、今回のプレテストでは、いずれも4ページずつへと倍増している。ページ数の増大だけでなく、解いていて「まだ設問が続くの？」とウンザリするほど設問も多い。試験時間を増やしたのだから良いだろうという話ではない。試験時間の増加は記述問題への対応ではなかったのか。主客転倒の感がある。

Iは分量こそ多い（2018年センター試験の11ページから13ページに増加）ものの、内容はスカスカである。計算量は激減し、計算などを含めた問題解法能力よりも、文章をどれだけ早く読んで処理できるかに力点が置かれているように思われる。

■ 記述問題について述べる。

第1問の〔1〕は「1のみを要素にもつ集合は集合Aの部分集合である」という命題を、記号で表記させる。正答例は $\{1\} \subset A$ であり基本的だが、本当に正答率は高いだろうか？ この分野は生徒の学習が手薄で、基本すら押さえ切れていないことが多い。従って、 $\subset$ の記号を理解していても、集合の記述の方にネックがあって、 $(1) \subset A$ ,  $1 \subset A$ などの誤答も多そうだ。配点5点は大き過ぎる。

第1問の〔3〕は、与条件を満たす階段の踏面の長さ $x$  cmの範囲を不等式表示させる問題である。正答例は $26 \leq x \leq \frac{18}{\tan 33^\circ}$ だが、三角比の方に気を取られ、「 $26 \leq$ 」の部分を忘れた誤答が少なくなろう。これも配点5点で、私どもの試験では、「 $26 \leq$ 」を忘れた誤答には2~3点の部分点を与えることが多いと思われるが、部分点はない。

第2問(1)(iii)の三角形の面積に関する問題で、「各時刻における $S_1, S_2, S_3$ の間の大小関係と、その大小関係が時刻とともにどのように変化するか」を記述で答えさせる。正答例の1つは「時刻によらず $S_1 = S_2 = S_3$ 」であるから、設問の仰々しさに比べれば正答は単純である。設問を読んだだけでパスした生徒も多からう。

実は「すべての $t$ について $S_1 = S_2 = S_3$ 」のような解答は、「移動を開始してからの時間を示す文字を説明せずに用いている」という理由により誤答で0点である。移動を開始してからの時間を $t$ と置くような設問にしておけば、問題文も簡潔に書けるのに、置いていないので回りくどい表現になっている。「問題文にない文字についてコメントできるかどうか」は重要ではあるが、ここでそれを問うて5点と0点を分けるのが、果たして適切なのだろうか。

■ その他気づいたことを述べる。

a: 第1問〔2〕で2次関数のグラフをコンピュータで描く設定が登場する。文字のスライダーはまるでGeoGebraである。こういったものを扱ったことがあると、理解が早い。

b: 第1問〔4〕で正弦定理の証明を扱うが、鈍角の場合がポイント。こういった部分を手抜きせずに指導することが肝要であろう。

c: 第2問〔2〕で、エクセルっぽい表が登場する。A列、B列などの呼び方は、エクセルを扱ったことがあればすぐ取り組めるが、全く触ったことがないと理解に戸惑い、時間を要するだろう。

さらに、相関関係を非常に少ないデータや、非常に特殊なデータで考える設問に違和感を覚える。

d: 第5問は $\triangle PQR$ に対して、 $PY+QY+RY$ の最小値を与える点Yの位置を問うていて面白い（知る人ぞ知る問題）が、最大角が $120^\circ$ 以上の場合の考察などに設問上の飛躍があるような気がする。

■ こんな形で共通テストが行われていくなれば、読解力の養成など、相応の対応が必要になってくるかも知れない。